

福島県いわき市の越冬白鳥(2007年12月, 2008年3月)

柿澤亮三

〒319-0123 茨城県小美玉市羽鳥2718-28

はじめに

福島県の浜通り地方に位置するいわき市には、白鳥の越冬地が何ヶ所か知られている。筆者は、越冬期の2007年12月と越冬後期にあるいは渡去期の2008年3月に、いわき市内の4ヶ所の白鳥渡来地を観察し、個体数を記録したので報告する。

観察結果

1. 鮫川(沼部橋上手)渡来地

いわき市沼部町内鮫川の沼部橋上流約500mの白鳥渡来地(写真1)で、第1回目の観察は、2007年12月21日午前8時30分~9時30分に行った。白鳥は給餌場附近に1群と、それより下流の沼部橋の間に2群の三つの群れに分かれていた。また川から数百メートル離れた水田でも、コハクチョウ5羽の成鳥が採餌していた。この観察では、136羽の白鳥を記録した。そのうちオオハクチョウは10羽(うち幼鳥4羽)、コハクチョウ126羽(うち幼鳥13羽)であった。オオハクチョウは、6羽(うち幼鳥4羽)の1家族と4羽の成鳥であった。



写真1. いわき市沼部町鮫川白鳥渡来地(2007年12月21日撮影)。

コハクチョウの幼鳥の割合は10.3%であった。13羽の幼鳥のうち1羽は孤児^{みなしご}であったため、幼鳥づれの家族は6家族で、1家族当りの平均幼鳥数(brood size)は2.0羽であった。家族の内訳は、幼鳥1羽づれが2家族、2羽づれと3羽づれがそれぞれ2家族ずつであった。

この渡来地では、朝1回の給餌が行われるがその量は少なく、白鳥は十分な餌を供給されていない。また見物人が買って撒く餌の量も僅かである。

第2回目の観察は、2008年3月13日午前9時20分に行ったが、このとき越冬白鳥は1羽も観察できず、沼部橋すぐ上手の中州に、1羽の傷病コハクチョウがいただけであった。越冬期間中よく採餌にでかける附近の水田も探したが、白鳥は1羽も発見できなかった。渡来地の近所の人の話によると、「4日前の3月9日には、まだ10羽ほどの白鳥が残留していたが、渡来地の周囲の土手の枯草を燃やしたところ、白鳥が飛び去った」、とのことであった。この日渡来地近くでは、マガモ(30羽)、コガモ(2羽)、キンクロハジロ(1羽)を観察した。

2. 夏井川上流(小川町三島地区)渡来地

いわき市内夏井川のJR線小川郷駅近くの白鳥渡来地(写真2)では、第1回目の観察を2007年12月7日13時40分～14時10分に行った。この観察では、オオハクチョウ6羽(うち幼鳥2羽)とコハクチョウ32羽(うち幼鳥4羽)を記録した。この附近の河川と水田では白鳥は発見できなかった。オオハクチョウは4羽(うち幼鳥2羽)の家族と成鳥2羽で、コハクチョウは6羽(うち幼鳥4羽)の家族と成鳥2羽であった。

この渡来地では、地区の人々が定期的な給餌を行っていると言った。また見学者がパンや米などを給餌している。

第2回目の観察は、2008年3月13日午前11時35分から10分間ほどの観察であるが、コハクチョウ26羽(うち幼鳥5羽)を記録した。

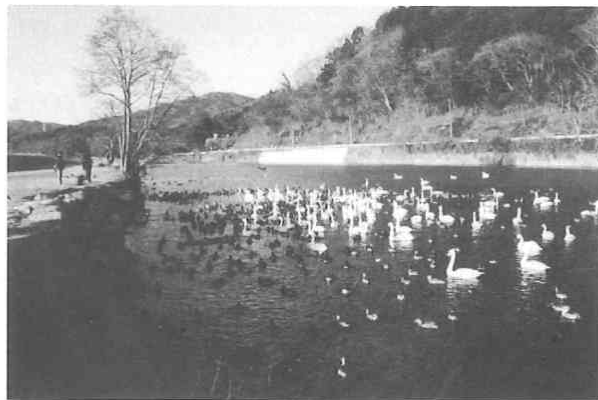


写真2. 夏井川上流小川町三島の白鳥渡来地(2008年1月18日撮影)。

3. 夏井川中流(赤井地区あるいは平中平窪)渡来地

この渡来地(写真3)は夏井川流域の3ヶ所の白鳥渡来地のうちで最も歴史が古く、上流と下流の渡来地は、この赤井地区から分散した群だといわれている。第1回目の観察は、2007年12月20日午後1時40分～2時10分に行った。この時オオハクチョウ3羽の成鳥と、コハクチョウ290羽(うち幼鳥34羽)を記録した。コハクチョウの幼鳥の割合は11.7%であった。幼鳥をつれた家族は19家族あり、1家族当りの平均幼鳥数(brood size)は1.9羽であった。その内訳は、幼鳥1羽づれが10家族、2羽づれが5家族、3羽と4羽づれがそれぞれ2家族であった。越冬期間中よく採餌にでかける赤井地区の水田も探したが、白鳥は1羽も発見できなかった。

この渡来地では、白鳥保護のボランティアによって、定期的な給餌(主に古米)が行われている。また、餌をもった見学者が頻繁に訪れ、シーズンを通して十分な量の餌が供給されていると予測される。

第2回目の観察は、2008年3月13日正午から40分間行い、コハクチョウのみ224羽(うち幼鳥45羽)を記録した。幼鳥の割合は20.1%と比較的値が高かった。近くの水田では白鳥は1羽も発見できなかった。



写真3. 夏井川中流平中平窪の白鳥渡来地(2008年1月18日撮影)。

4. 夏井川下流(平塩中島地区)渡来地

いわき市内中心部近くの夏井川平塩中島地区の渡来地(写真4)は、下流域のため川幅が広く、広大な中州が何ヶ所もある。第1回目の観察は、2007年12月20日正午～13時で、この日の白鳥は3群に分かれていた。一つ目の群れは新川との合流点近くの中州におり、コハクチョウ95羽(うち幼鳥13羽)を記録した。2番目の群れは、初めの群れより約300m下流の給餌場附近の広い中州におり、コハクチョウ29羽(うち幼鳥5羽)であった。3番目の群は、2番目の群れより更に下流300mほどの場所におり、オオハクチョウ28羽(うち幼鳥4羽)とコハクチョウ64羽(うち幼鳥6羽)を記録した。この場所の合計羽数は、オオハクチョウ28羽(うち幼鳥4羽)とコハクチョウ118羽(うち幼鳥24羽)であった。オオハクチョウの幼鳥4羽は、幼鳥2羽ずつの2家族であった。コハクチョウの幼鳥の割合は12.7%で、幼鳥づれの家族は13家族であったので、一家族の平均幼

鳥数(brood size)は1.8羽であった。家族の内訳は、幼鳥1羽づれが6家族、2羽づれが3家族、3羽づれが4家族であった。

第2回目の観察は、2008年3月13日午前10時26分～11時で、この日は少し離れた2群を認めた。1群は新川との合流点附近の中州で、コハクチョウ21羽(うち幼鳥5羽)を記録した。もう一つの群れは、初めの群れより約300m下流にあり、コハクチョウ254羽(うち幼鳥31羽)であった。両群を合計すると、コハクチョウのみ275羽(うち幼鳥36羽)であった。幼鳥の割合は13.1%であった。



写真4. 夏井川下流平塩中島の白鳥渡来地(2008年1月18日撮影)。

まとめ

2007年12月と2008年3月に観察したいわき市内4ヶ所の白鳥渡来地の渡来数と幼鳥数および家族当りの平均幼鳥数(brood size)を示したが、筆者の感想としては、人為的・自然的にかかわらず、十分な量の餌が供給される渡来地に、越冬白鳥は執着するように思われた。夏井川の3ヶ所の渡来地に比べ、鮫川渡来地での餌の供給量は少ないことを実感したが、この事が渡来数の少なさと越冬期間の短さに密接な関係があるものと考えられた。夏井川流域の3ヶ所の渡来地の越冬数を比較すると、上流域の渡来地が一番餌の供給量が少ないものと予測される。中流域渡来地では、人為的な給餌が充実してはいるが、自然の餌量は上流域と同様に少ない。一方下流域渡来地は、定期的な給餌は行われていないが、市街地を控えている分、河川の富栄養化が進んでおり、自然の餌の供給量は多いものと考えられる。白鳥渡来地における供給される餌の量と渡来数および渡来期間との関係について、今後調査をすすめたい。